

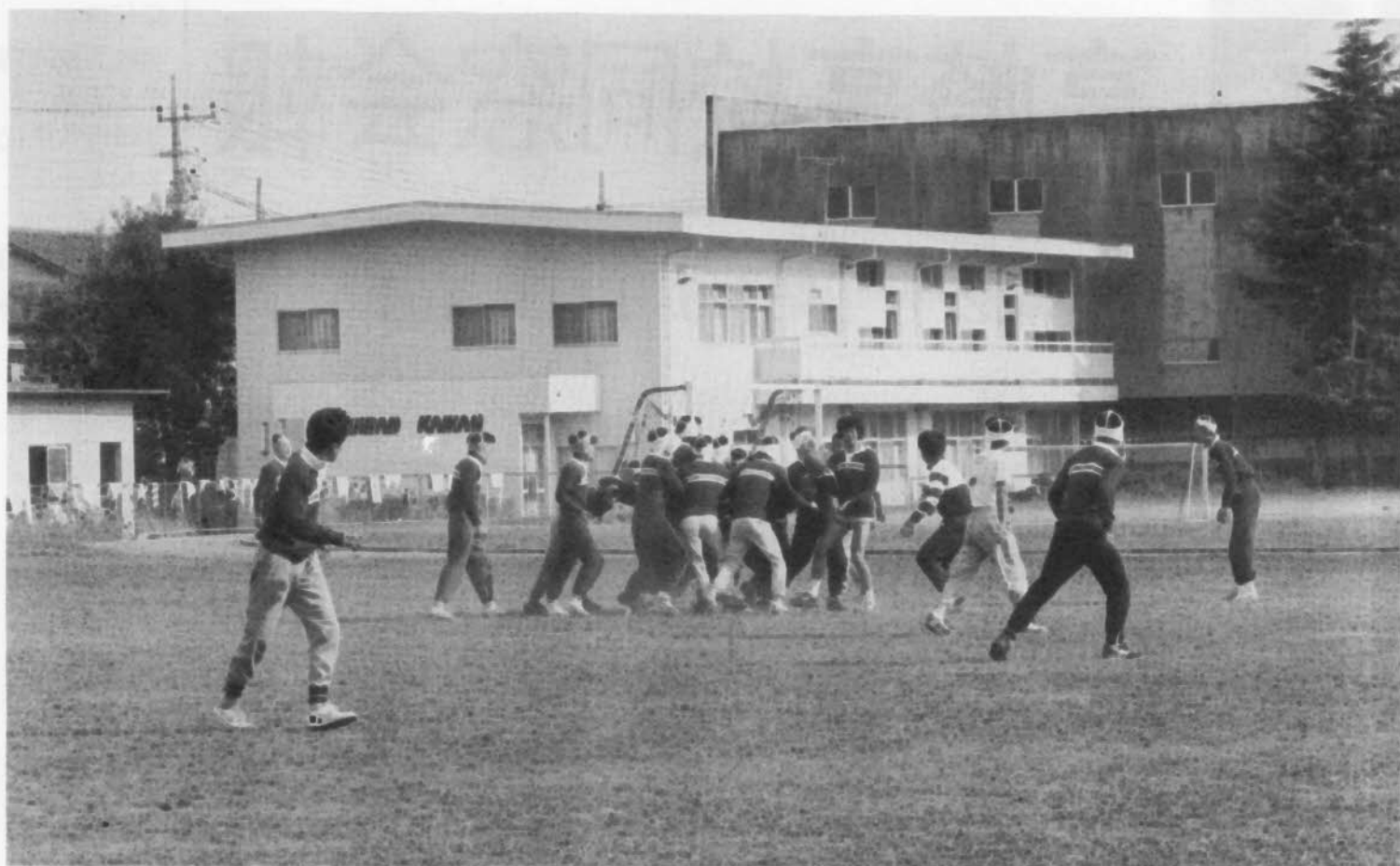
高崎高校同窓会報

第22号 昭和63年11月30日

1988

発行所
高崎高校同窓会
〒370
高崎市八千代町
2-4-1
TEL
0273-24-0074





〈表紙〉 岩山 猛 (49回)

高高同窓会報 No.22 目次

学内の充実を期待する	同窓会会長 柴山大五郎	3
信頼と礼儀ある教育	学校長 磯貝 福七	4
乗附の学会五十年を迎え	同窓会副会長 重田 精一	4
会員の献身的な母校愛に支えられて	同窓会副会長 須永 孝	5
創立百周年を間近にひかえて	同窓会副会長 横田 英一	5
よりよき発展と充実を求めて	PTA会長 田中 順	6
全国の中での高生	全日制教頭 塩浦徳三郎	6
乗附校舎移転五十年		7
特別寄稿 思い出すままに	須永 誠一	8
我が愛する郷土高崎	小林 一雄	9
論壇 「リダンダンシティ」	三木 克彦	10
回想記 高橋邦雄先生を偲んで	横山 巖	11
ハダシの青春	茂木 弘道	12
通信教育との出会い	大矢 保子	13
卒業生の作品紹介		13
記念碑「山」のためのエスキース	中島 嘉樹	13
同窓会だより		14
翠樹育英会の充実を願って	石井敬之助	14
三三会の現況	海老原英吉	14
京浜同窓会	中曾根信雄	14
ラグビーと私	真下 昇	15
母校だより		15
学芸部報告	波戸場研二・美術部代表・茂木 道弘	16
運動部報告	清水 敏男	17
第四十二回高高・前高定期戦	中島 広明	18
翠樹文庫	吉永 哲郎	19
最近の進学状況について	佐藤 忠弘	19
同窓会会計報告・予算案		20
新年総会へのお誘い		20
同窓会会則改正		20

草野心平氏御逝去 本校校歌の作詞者、草野心平氏（芸術院会員、文化勲章受賞者）が、去る11月12日御逝去されました。慈んで御冥福をお祈り申し上げます。



学内の充実を期待する

同窓会会長 柴山 大五郎

我が国は短期間のうちに、世界の経済大国に成長した。貧乏国日本で、常に生活の不安に脅かされながら育った私のような昔者には、現在の世相は想像も出来なかった。

今や、我が国の商品は全世界に輸出され、ドルの保有高は世界一位となり、一方、後進国には思い切った経済援助を行う等、積極的な外交政策を展開し、また、米国の売出す国債は我が国の機関投資家が30%以上も購入し、これに依って、米国の財政が円滑に回転しているとか。真に驚いた大国になったものである。

この原因は種々あるが、第一に教育が国民全体に普及したことである。第二が国民の勤勉性である。勤勉と同時に職場を大切にす忠誠心を持っていることである。第三は国民の貯蓄力である。この資金は公共投資や産業資金に活用され、経済に大きく貢献している。この反対が米国で、貯蓄が少ないから、産業資金の調達がスムーズでない聞く。

何と言つても軍備に大金を掛けていないことである。兵器に使用する金は民生には何の役にも立たない。その上、時機が来れば時代に合わないとして廃棄処分になってしまう。若し、米・ソの様な軍拡でもしたら、現在の豊かさは望むべくもない。

数年前までの日本経済の構造は、好況になって来ると物価が上がり、インフレを警戒して、金融を引

き締め、金利を上げる。その結果物価は下がり、不況になって、倒産と失業者が続発する。そこで政府は景気浮揚策をとり、公共投資を増額し、金融を緩め、金利を下げる。この様なパターンを戦後何回か繰り返して来た。

然るに現在は大変好況で、内需も消費も共に拡大し、学生の卒業見込者は引張り風である。輸出も勿論好調である。それにもかかわらず物価は上がらず、金融は潤沢である。数年前とは様変りの経済構造である。国会では税制改革やリクルートの問題があるが、大勢にはさ程影響しないであろう。是非、この好況を長続きさせて、社会資本の充実を図り、真に力のある日本国にしたいものである。

去る、十月二日、ソウルのオリンピックが大成功裡に終了した。世界の百六十カ国が参加し、東西の両陣営が、仲良く、同じ土俵の上に登りスポーツを競った。参加国の中には、昨日まで戦争していたイラクやイラン、内乱が続いているビルマやパキスタン、他にも困難な国情を克服して参加した多くの国があった。これを感じる時、近年にない大きな人類の祭典であり、意義誠に大きなオリンピックであったと感銘を深めている。些細なことは有ったが、大局的に見れば世界は平和であると言う言葉に象徴されるよう。

世界の平和は我が国に殊に大切で、平和でなければ

ば現在の我が国はあり得ないし、平和の恩恵の上に経済の進展もあると確信し、平和の尊さを強く感ずるものである。

この様な時に、吾が母校は次の世代を背負って立つ有能な資質を持った青年を多く送り出して頂きたい。先輩には立派な人が多い。この人達の尊い経験を土台にして、一層の飛躍を願うものである。

最後に一言お願いしたい。人間には種々の個性があつて、この個性を大切にして、伸ばすことは必要である。学問だけが出来るのが能ではない。しかし高々に入学者の者の大部分が大学への強い進学希望を持っている。今に始まったことではないが、現役からの進学率が低過ぎる。先生方が日夜心を砕いてご苦労している事は分かるが、生徒に学科の本質を理解させる工夫がもう一歩足りないのではないか。当県の学力は低いので、隣県の優秀校を目標にして、勉強させるのも一方法ではないか。私は国立の学校で教鞭をとったことがあるが、教育は一に教師の情熱に依ると確信する。

何れ創立百周年の記念事業の準備も考えなければならぬ時期に来ているが、母校の内容の充実が何にも増して大切な事業であると信じている。何卒関係各位のご健闘をお願いする次第である。

(大和設備工株式会社)

取締役社長 32回)



信頼と礼儀ある教育

学校長 磯貝 福七

同窓会の皆様には、平素より一方ならぬ御助力を賜り、深く感謝申し上げます。

原一雄会長には九か年間、本校のために御尽力くださいます、お礼のこたはございません。その間、「高崎高校八十年史」の発行、選抜高校野球大会をはじめとして、サッカー部、軟式庭球部、ラグビー部、将棋部などの全国大会への出場、翠濤育英会の設立、九十周年記念事業（「翠濤会館」の増築、「九十周年小史」の発行）の実施など多岐にわたって、格別なる御高配、御援助をいただきました。また、このたびは柴山大五郎氏に会長をお引き受けいただきまして、誠にありがたく存ずる次第でございます。

顧みますと、上和田から現在の地に移転いたしました五十年目に当たりますが、本校生も、二万有余の諸先輩の後塵を拝して、努力しております。

さて、現在の二年生から共通一次試験にかわって大学入試センター試験が実施されることになっておりますが、その動向を見極めつつ、教育課程や学校行事の見直しなどを進めております。

二年生からのコース分けや一年生における修学旅行の実施などがそれぞれでございます。大学入試の状況もここ数年だいは変わってきておりまして、現役で合格することが容易ならぬ状況になっております。

しかしながら、教職員と生徒とが一体となってこの困難な事態を克服すべく日々努めております。部活動と学習とが両立しにくい状況もございますが、現実に安易に妥協することなく、この難題に自ら挑戦する強固な心構えを堅持してこそ道はひらかれると信じて、地道な活動を続けております。

休業中はもちろん、日ごろの練習にも余念がなく、スケート部がインターハイ・国体に、軟式庭球部、陸上部、登山部が関東大会に、また、囲碁・美術部が全国大会に進んでおります。

ともあれ、二十一世紀の到来、本校創立百年へ向けて、「信頼と礼儀ある教育」をモットーに、日々の教育に微力ながら全力を尽くす所存でございます。今後とも同窓会の皆様のかかわり、御援助をお願い申し上げます。挨拶とさせていただきます。



乗附の学舎五十年を迎え

同窓会副会長 重田 精一

このたび、光輝ある伝統と団結を誇る高崎高等学校同窓会副会長をおおせつかりました。浅学非才の身であり、身のひきしまる思いがいたしてありますが、精一杯努力をいたす所存でもございますので、同窓会皆様の御指導と御助勢を賜り度、お願い申し上げます。

庭は霜柱でサクサクといった状態から陽がさしてくると、霜柱がとけて、ぬかるみと化してしまう有様であり、校舎も控所（雨天体操場を兼ねた集合所）はありましたが、講堂はなく、勿論体育館などありませんでした。

昭和十三年の師走、第二学期の期末試験の終了をまつて、上和田台上の旧制高崎中学校校舎（現高崎市立第一中学校）から、乗附原頭の現高崎高等学校校舎への移転がはじまり、年内におおよそ完了、翌昭和十四年一月から、新しい学期とともに、授業が開始されたのであります。授業開始と同時に、当時の正課科目であった、柔道・剣道の寒稽古もはじまりました。寒中の午前六時から登校、その寒さは格別でした。現在の君が代橋と和田橋の間にあった八千代橋、千代橋を渡り、鳥川・碓氷川を越す頃には、額の右半面は寒さのため感覚がなくなってしまうよう、ビリビリし、そのつめたさはたとえようもない感じでした。

当時の旧制中学校の五年生（最高学年ですが）の第三学期は二月中旬位までの登校で、あとは、大学、高等専門学校などの入学試験やら、就職活動に日を費やしていたので、実質的には四十日位しか乗附の新校舎に通っていないことになりました。そして卒業式は、控所で行われたことを記憶しております。

こんないわば草創期のことを思いだしつつ今日の高崎高等学校をおとづれてみると、校舎のたたずまい、よく整備されたグラウンドの中で、若き在校生諸君が、青春の血潮をたぎらせて活躍している姿をながめると、感無量なのがあります。

乗附の学舎五十年を迎え、創立百周年への一里塚として考えたいと思っております。（重田医院院長 38回）

学校の授業がはじまったものの、校



会員の献身的な母校愛に支えられて

同窓会副会長 須永 孝

今回はからずも、高崎高校同窓会の副会長を命ぜられ、身に余る光栄を感じ謝致しております。

いうまでもなく、我々の高同窓会は、会員の献身的な母校愛に支えられて、全国的にもまれにみる発展をとげておりますが、特に財務内容においては、極めて安定した堅実な状況にあります。

かつて監事として、この十数年をまもって来たものとして、その内容の充実、目をみはるものがあります。小山長四郎元同窓会長の時に創設されました維持会費制度をはじめと致し

まして、原前同窓会長の肝入りではじまりました本部幹事制度、また五十期の方々の努力によつてはじまりました同窓会総会の幹事のもちまわり、更に財団法人翠樹育英会の設立等々、母校愛あふれる会員の力を結集する為の努力は、すばらしいものがあると思います。

今後とも、母校及び同窓会の発展のために微力をつくす覚悟でございますので、先輩、同輩、後輩の皆様方の御指導と御鞭撻を、心よりお願い申し上げます。
(梅玉堂社長 47回)



創立百周年を間近にひかえ

同窓会副会長 横田 英一

創立百周年を間近にひかえた高同窓会副会長の大役を仰せつかり身の引き締まる思いと同時に、内心忸怩たるものがあります。

本校は、開校以来今日迄幾多の変化混乱を乗り越えながら秀れた人材をそ

の時々世に送り出して来たのであります。その中には日本の運命になった内閣総理大臣の二人を始め、政界、官界、経済界、文化芸術、スポーツ界等あらゆる分野で日本を指導し影響を与えた名だたる数多くの優秀な人材を輩

出しておるのです。誠に輝かしい伝統と長い歴史をもった同窓会なのであります。この同窓会の副会長に私如きが指名を受けたのであります。本当に驚きと不安で一杯であります。

しかし思い起せば昭和二十年、旧制高崎中学に入学・軍事訓練と勤労奉仕、加えて空襲に明け暮れた日々を過し終戦。戦後は教育も一変し、それと共に復興に向かつて力強く歩みだしたのであります。昭和二十二年学制改革が行われ、我々は群馬県立高崎高等学校附設中学校三年生というややっこしい渦の中にまき込まれました。新制高崎高校の帽章、袴章、バックルも設定され、校友会・運動部も復活し、特に前高との定期戦もこの時期に発足したのであります。

この様に新制高校の礎を着々と築いて来たのでありますが、昭和二十六年



一月三十日に不慮の火災により大切な校舎を焼失してしまいました。最上級生として焼跡整理をしながら一日も早い復元を全員涙で誓い合つたことは今でも鮮明に脳裡にやきついていきます。

我々は最も多感な青春時代の六年間を乗附で学びました。しかもこの間日本の上上初めの終戦を経験し、校舍焼失というショックを体験したのであります。この経験は数多くの同窓生の中で我々の期でしか味わえなかったことを思う時、母校への恩返しと将来への発展のお手伝いをしなくてはならないと思ひ取えてお引受け致した次第です。

先輩諸兄のご指導をいただき出来得る限り努力致す所存です。よろしくお願い申し上げます。

(群馬トヨタ自動車株式会社・

取締役社長 50回)



よりよき発展と充実を求めて

P T A 会長 田中 順

創立九十周年記念事業で新装近代化された翠樹会館、教育後援会による校庭整備等、先輩各位の皆々様の暖かいお心尽くしで環境整備されたなか、地域社会の方々の庇護のもとで子供達は心身の健全な発育に、計り知れない、有形無形の寄与を受けております。

今回、役員改選により、母校 P T A にお世話になることになりました。

奇しくも本年は、本校が上和田から乗附の地に移転して半世紀、五十年の節目にあたる意義ある年でございます。

在籍する生徒にとっては、本校の煌めく悠久の歴史の中で、学校史を繙き、近現代史の時の流れを肌で感じ、同窓生としての自己の存在を明確にできる幸せを噛みしめることが出来る絶好の機会でもございます。

長野元会長(49回)、柴山前会長(61回)のもとで、母校 P T A の事業が活性化し、その基盤作りのお蔭で、昨今は P T A 会員の積極的な参加が顕著になってまいりました。その雰囲気絶やすことなく、P T A の本質・子供達の幸せについて、校長先生をはじめとする八十有余名の教職員のお力添えの

もと、千二百有余名の生徒の親達が暗中模索しながらも、拱手傍観することなく、会員の御協力のもと、一つの目標につき進んでまいる積もりでございます。

人生は変革期の連続であり、子供達にとって高崎の三年間は疾風に勁草を知るよい時期かとも思います。

親にとっても、不易流行の真髄を知り、いつの世にも変えることのないものとして、父権・夫権の復活は勿論のこと、家庭における教育機能の復原を計り、家庭・学校・社会のそれぞれの教育力の回復こそ、質実剛健を校是とする高々の意気壮なることを天下に示すものと思われまします。

諸先輩の築かれた素晴らしい高崎 P T A の名を汚すことなく、よりよき発展と充実を求めてまいる所存でございます。今後、疾風怒濤の歴史の中に於いて高崎の伝統を創造的に担い継承する在校生のためにも高崎 P T A を御叱正下さいます様、お願い申し上げます。就任の挨拶とさせていただきます。

(田中歯科医院院長 51回)



全国の中での高崎生

全日制教頭 塩浦 徳二郎

私が今年四月高崎高校に着任して以来、はや一年の三分の二が過ぎようとしております。想えば昭和三十七年七月から同五十二年三月まで本校にお世話になり、十一年を経て再度の赴任となりました。講堂、体育館、理科棟や銀杏並木、樺の類は昔を偲ぶすがとして懐かしく思われますが、一方でそれだけに伝統と責任の重みをひしひしと感じさせられる日々であります。

十年一昔と言います。十一年の空白期間は生徒の気質の違いの大きさをつくづくと感じさせますが、その時々々の生徒への指導法は地域社会等の要望にこたえるべく常に工夫されねばならぬものであります。言うまでもなく教育には不易と流行とがあります。

不易の部分、即ち伝統の三 F 精神と文武両道とは実のあるものとして生き続けております。時として生徒の意欲の低下とか学習時間の不足とか指摘されますが、学校あげて学力の向上、意欲の高揚に取り組んでいる次第であります。「馬に水を飲ませるため川岸まで連れて行くことができるが、水を飲むのは馬自身である」という諺を思い出

します。教育もこれと同じであります。一時も早く水を飲ませたいが、なかなか飲もうとしない、そこで理由は何なのかを追求し、次に水を飲む意欲を起こさせることが教師の務めであると確信しております。幸いなことに本校は博識、経験豊富な、そして教育行政に秀でた学校長のご指示と、数多くの優れた、有能な先生がた自身の精進と指導によって支えられております。

中国の淮南子という書籍の中に「画者、毛を謹みて貌を失う」という言葉があります。目先のことにとらわれていると全体像を見失うという戒めであります。高崎生は日本全国の中で高崎生としての位置付けと自覚に立つての文武両道でなくてはなりません。二十一世紀に向けて国際性豊かな人間形成とリーダー性の涵養こそ高崎生に期待されるところであると同時に、また責務として努める所存でおります。同窓会のいや栄えと今後のご指導、ご鞭撻を衷心よりお願い申し上げます。てあいさついたします。(46回)

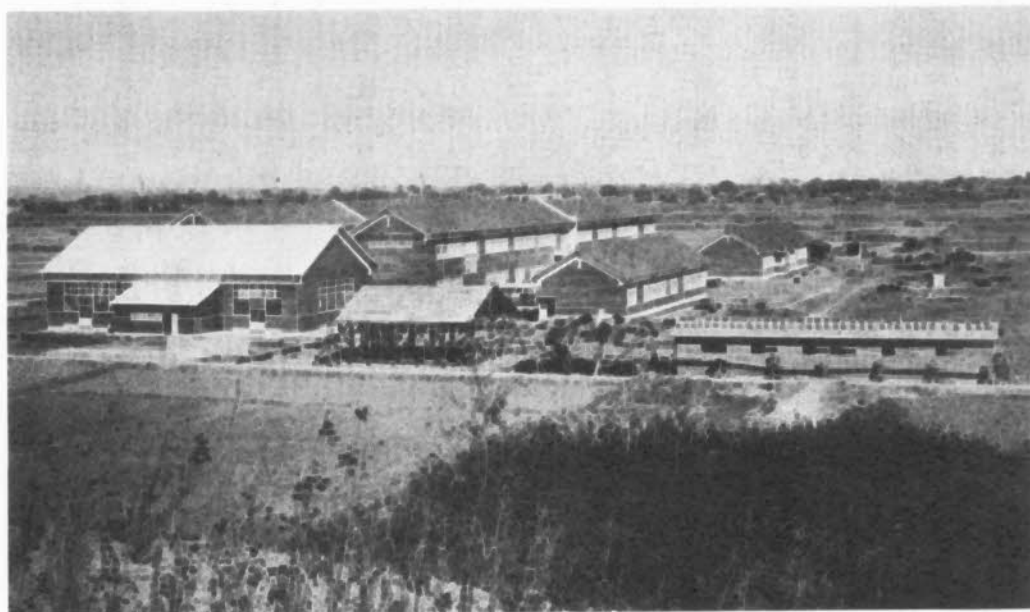
乗附校舎移転50年

高崎高等学校（旧制高崎中学校）は明治30年、高崎町大字赤坂町の長松寺の仮校舎で発足し、明治32年本校舎の完成と同時に上和田の地に移転した。

以来30数年をその地で過ごしたが、震災等による老朽化、運動場拡張の必要性もあって、昭和13年、現在の乗附の地に移転した。校舎は、昭和26年の火災消失に伴う改築、昭和49年から53年にかけての近代的校舎への改築と、2回の大改築が行われ、現在は講堂を除いて、移転当時の建物は残っていないが、ここ乗附の地に50年の歳月を積み重ねてきた。



旧校舎正面玄関



建築中の旧校舎



竣工なった講堂を望む

特別寄稿

思い出すままに



一 誠 永 須

も応召中給料を貰わなければ留守家族は食っていけない。然し今考えると、あの戦時中に大勢の出征兵士をかかえて各企業はよく給料が払えたものだと思う。昨今の会社は、情勢の変化に応じて合理化とか何かで人員の整理や配転等、相当きびしく行われているようである。そしてTQCの採用等で一層の合理化や能率のアップを図り、GNP世界第二位と躍進を遂げたわけである。

無駄がなく、隙がなく、立派ではあるが息苦しい世の中になってきたような気がする。若しここで息抜きをすれば忽ち脱落してしまうのであろうが、然し人間は昔から大きい無駄や馬鹿馬鹿しい事をしながらも五千年余に及んで繁栄を続けている。無駄の最たるものは戦争であろう。エジプトのピラミッドやスフィンクス、中国の万里の長城やアジア、アフリカ、南アメリカ等の巨大な遺跡等、いまの人には想像も出来ない、大きな無駄とも思われるものが造られてきた。然しこれらは、人類にとつては誠に素晴らしい遺産ではないだろうか。

昭和十二年七月の支那事変から二十八年八月の大東亜戦争の敗戦に至る八年の間に夫々召集によって兵隊になられた人達は、其の期間に応じて勤めていた会社から給料を貰っていた。もつと

米ソが主導権を握っている宇宙開発が後世にどんな良き遺産となるのであろうか、無限の効用を残されんことを期待したい。

馬鹿馬鹿しい無駄と思われる事も人類には或る程度は必要な事でしょう。

「幕何」や「莫迦」の当て字に馬・鹿・の字を用いるようになったのは、秦の二世皇帝に仕えた趙高が皇帝に「鹿をさして馬となす」から始まったとか。

小生十六年八月から二十年八月まで馬と明けくれた四年間の体験から「バカ」の当て字に、鹿のことは知らないが馬と云う字を使い始めた人は粹も甘いもこころえた達人ならん。

「莫迦」も「馬鹿」という字からはユーモラスな、そして人間らしい温かみを感じる。大体人間は時には馬鹿な事をしでかす。コンピュータを駆使している、情報社会になっても相変わらずであろう。

尤も馬鹿らしい事をやりかねない人の方が人間らしい。惻巧すぎて隙のない人とは一般の人は付合にくいのではないだろうか。

馬鹿が世を持つという。そして馬鹿を「バカ」にする奴が一番「バカ」だと。

大正の後半に高崎南校で小学生時代を過ごした小生は、「ハーレー」や「インディアン」の「オートバイ」をブンブン乗り廻していた冒険王の「ハクケン

ハッチ」「チャップリン」や「ロイド」の喜劇、「ターザン」の活動写真等アメリカがうらやましかった。

昭和に入つてマキノ映画の時代劇の版妻の活躍、幕末や明治維新に生ればなあ、などと思つたりした。

昭和二年高中に入学、三年生までは陸上競技や水泳、バスケットボールなどを仲のよいグループと勝手に遊びまわる。四年生になつて野球部へ、しかし身体をこわして役に立たず。

七年に卒業、そして小樽へ。ラグビーとスキーに明けられて、十二年に卒業。就職、転職、軍隊へ、そして終戦。無事に生きのびて現在へ。ラグビーは、ほんとうに楽しかった。団体競技としては人数が一番多い。それだけ適材適所に配置出来る。そしてラグビーは球を持った者がリーダーであり、其の間瞬間に応じて適切な判断を自ら下して味方を有利に導かねばならない。数少ないチャンスとはいえ、自らの判断で試合をリード出来るという事は楽しい限りでした。但し、失敗も多かったが、

One for all, all for one.

二十一世紀は日本、アジアの時代といわれている。時の大きな流れのせい、いい世の中になることを願っている。

「生れる死ぬは神の思召し」嗚呼。
(井上産業(株)取締役相談役 31回)

特別寄稿

我が愛する 郷土高崎

小林 一雄



私は高崎市内の商家に生れ育った。高崎の家並の中で、えびす講市、どんどん焼、山車、初荷売出等想い浮べると大変メルヘン的な気がするの、単なる郷愁であろうか。併し大きなものにつれて、満州事変、支那事変等何となく窮屈な世の中になって行った。家業の方も統制色が強くなって、自由な営業が仕憎い状況になりつつあった。こんな時代なので家業の将来の見通しも暗く、年の近い叔父の影響もあって、私の歩むべき道は、自然と中学校、高等学校、大学を目指す様になった。幸いにして希望通りのコースで進学し、

終戦直後の昭和二十二年秋大学を卒業し、専攻した学科に関係ある東京の企業に就職した。一方、家業の方は自由経済になり、戦争の為に辞めた従業員も復帰したので、男のキャップが必要となった。父は昭和十九年に他界して居たので、あれこれと悩んだ末、家業を継ぐ事を決心し高崎に帰って来た。高等学校、大学、勤めの時期と約八年間東京に住んでいた勘定になるが、その間を抜かしては六十四歳の現在迄ずっと高崎の歩みと共に過して来た。それ故に郷土という念が強く、愛着を覚える者である。高崎も戦後の復興期を経て成長期を迎えたが、私共は、卸商業団地の組合を作り、手狭な旧市街地から現在の問屋町に集団移転を行い、大変な成功を収めた。此の頃から地域との連帯の上で各企業も発展するものである事を痛感した。地域の発展と個々の企業とは密接に結び着いて居るので市の一層の繁栄を願う者である。

さて、現在の高崎市の状態はどうかという点必ずしも満足はいく状況ではない。他所から高崎を眺めると、高速交通網の結節点であり、首都圏から時間的至近距離にあるので、近來の大宮市の発展が当市でも見込められると思われ居る。此の様な事から多くの企業、特に商業が進出して来た。結果は大多数が見込み外れとなり、撤退した例も多い。此の様に高崎程他所から見ただ

来性と、地元の進みつつある現況とのギャップが大きいのも珍しいのではないかと思う。市の現状を見ると市内の商店街は虫喰い状態にシャッターを閉め、或いは空地となって居る。旧市街地の沈滞は眼を覆うものがある。私共地元の経済人は此の現状を何とかしなければならぬと苦慮して居る。多くの地方都市の運命だと片付けられない問題である。大平内閣の時から地方の時代と言われ、近くは四全総でも、首都圏と地方都市との均衡ある発展との課題を掲げながら、依然として首都圏への人口、経済の集中は進んで居る状況下にある。

此の時我等何をなすべきか。過去を振り返ると、チャンスは何回もあった。第一回目は終戦直後である。市の中心の田町、連雀町が強制疎開と、焼夷弾の被爆の為空地になって居た。此の時現在の繁栄を予測する事は困難であつたろうが、少なくとも大胆な都市計画を実施するチャンスではあつた。第二回目は卸業者の集団移転の時である。市街地の中心部にあつた数多くの卸業者の店舗が空いたのであるが、団地へ進出する卸業者は跡地の利用、或いは移転後の商店街の整備活性化等は、自分の大事業で手一杯で、そこまで考え及ぶ状況ではなかった。あの時何らかの機関で跡地の統合再開発がされて居たらと思うのは此れも後講釈であるうか。

では此れからどんな都市を目指したら良いのか。此れは至極簡単でまた難しいのであるが、誰もが住んでみたい街にする事である。従来の都市は機能面のみを重視して来た。ハード面さえ整えば人は快適に住むものと考えて来た。高崎市も都市計画が早急に実行されれば、ハード面では大変優位な立地条件になるが、人口の増加の予想は誠に寂しいものがある。此れにはソフト面、即ち市民の合意の上に立つた、哲学的、文化的、情緒的な面に於ける具体理念の確立が必要と思う。此れは官民一体となって早急に確立する必要がある。

その上で高崎を将来発展させる為には二つの側面から見る必要がある。一つは地方の中核都市としての位置づけ、今一つは亜首都圏として、通勤圏都市としての位置づけである。此の二つの面については紙面の関係で言及出来ないが、最後に高崎を離れて御活躍中の同窓生へのお願いである。東京圏へも通勤出来る高崎に定住する事を御検討頂き度いと考えている。

(小松総業(株)代表取締役 41回)

リダンダンシイ (redundancy)「余分」を意味し、冗長性、重複性と訳される。

政府は、昭和六十二年六月、第四次全国総合開発計画を策定し、二十一世紀に向かう国土計画の目標を、「多極分散型国土の形成」と定めた。東京圏への高次都市機能の一極集中を是正しつつ、本格化する高齢化、国際化、情報化など経済社会の大きな変化に対応する政策が、今後十数年にわたり、体系的に展開されることとなる。

計画の基本的課題の一つに「安全で質の高い国土環境の整備」があり、複雑・多様化していく災害に的確に対応し、国民生活の安全を確保していくことが要請されている。

我々の住む日本列島は、きわめてきびしい自然条件のもとにおかれている。梅雨、台風、豪雪に見舞われて毎年大きな被害が生じ、環太平洋の地震帯・火山帯にあり、地震と噴火のエネルギーの約一割がそれぞれ列島附近に集中することから、歴史上多くの地震災害、噴火災害を経験してきている。

現在でも、東海地域や南関東地域に、大被害地帯の発生を懸念する声が強い。しかし、現在の我が国の社会は、優れた科学技術力、経済力などを有しており、総力を挙げて大地震に立ち向かうことが必要で、地震発生の子知、都市防災力の強化、

応急対策の推進の三本柱を中心に地震対策を推進している。

特に重視されるべきものとして、大災害発生時におけるライフライン機能（市民生活や産業活動に不可欠な電気・ガス・水道・電話など）の維持の課題がある。施設的重要性に鑑み当然のことながら、設備自身の耐震性、耐火性などは充分確保されているが、あわせて、送電線のループ化、配水系統の複合化、伝送路のバイパス化、テレビ中継伝送路の2ルート化などいわゆるリダンダンシイの確保が着々と進められている。ライフライン

◇ 論壇 ◇

「リダンダンシイ」

三木克彦



の経営サイドからは、冗長・余分な投資であるが、防災サイドからは、重層性を確保する価値の高いものであり、ライフラインの公益的使命を全うすることとなっている。

東京圏に集中しているコンピューター機能についても、データーを他の地域に重層管理して機能のバックアップを図ることが進行しており、これもリダンダンシイの発想に属するものである。

余分・冗長と見えても、万一に備えての機能維持のための投資は、必要的ゆとりともいえるべきもので「リダンダンシイ」は、第四次全国総合開発

計画のキーワードの一つとなっている。

我が国の経済社会は、高度成長過程から調整過程を経て、今や成熟過程に向かいつつある。経済的繁栄は、世界の驚異とされ、日本経済の動きは、世界経済に大きな影響を及ぼすに至っている。

国民生活も、所得水準の向上、余暇時間の増大、価値体系の多様化などにより、新しいライフスタイルに急速に変容しつつある。

二十一世紀にやがてやってくる豊かな社会は、人間社会の到達する一つの極である発展した社会でありうるが、同時に、地球の有する全体条件のもとで脆い壊れやすい構造をも有している。人口の爆発的増加、資源制約の顕在化、環境の総体的悪化などのさまざまな問題が指摘されている。日本の経済社会の着実な発展のためには、あらゆる場において、必要なリダンダンシイを確保し、柔軟であり強靱である構造物とすることが必要である。

個人のライフスタイルの面でも、急ぎ足でやってくる高齢化社会に対応し、忍びよる老いに明るく対抗して、心と体の健康を維持していくことが必要である。安全で快適な生活の実現のため、日常生活のリダンダンシイを多角的に工夫して、健やかな生を楽しむことが期待される。

高々五十二回生は、山田博久君、岡村品夫君の名会長のもとで、祝い好き、祭り好きの交流を楽しんできた。青春の日に回帰した集いが、価値の高いリダンダンシイとして位置づけられるなら、意義深く楽しいことである。

(国土庁防災局長 52回)

私の回想記

高橋邦雄先生を偲んで

横山 巖

旧制高崎中学校（二十八回卒業）の大先輩で、県副知事、参議院議員等の要職を歴任された、高橋邦雄先生が八月二十六日に逝去されてから二か月ほどになりますが、にわかに幽明境を異にされたので今だに信じられないような思いでいっぱいです。

先生は、平素筆まめにものを書いておりましたので、先生これを編集し、「わたしのアルバム」と題して刊行されましたが、その後に書きためたものを「続・わたしのアルバム」として今年の七月に出版されました。その冊子が先生の訃報と前後して恵送されてま

き昭和と改元された。われわれが在学した五年間は、振り返ってみると、戦争前夜を思わせるような時代だった。

先生は、高中卒業後旧制松本高等学校を経て京都帝国大学法学部に学び、群馬県に奉職されましたが、県庁では数々の主要なポストを歴任し、出納長、副知事として県政の中枢にあつて活躍されたのであります。その後参議院議員に当選、法務政務次官、地方行政委員長等として国政に参画され、退任後は群馬県スポーツ振興事業団の初代理事長に就任、県民スポーツの普及振興に尽瘁されました。

また、先生には県庁関係の高々（高中）卒業生の同窓会（高朋会）の会長をお願いし、昭和四十六年以来逝去されるまで十七年間にわたりご尽力をいただきました。その状況については、昭和六十一年十一月の同窓会報に「高朋会だより」として先生が寄稿されておりありますが、母校のさまざまな記念行事や運動部の全国大会出場などの際は、会長が中心になって会員の総意をまとめ大いに協力してきた次第です。

先生は、国・地方を通じて広い分野にわたりご活躍になりましたので、そ

の業績や思い出は枚挙にいとまがありませんが、ユニークな思い出として上毛新聞の「粋筆漫歩」の筆者に選ばれたことがあります。先生の「粋筆」は、ご専門の県民スポーツのことから趣味の囲碁の話、アメリカ国籍を持つお孫さんの話など多彩なもので、先生特有のソフトなタッチで書いた文章が大変好評でありました。

先生には、私たちの大先輩として公私にわたりご指導ご交誼をいただいておりますが、先生はきわめて円満な温かいお人柄で、バランス感覚の豊かな素晴らしい存在でありました。また、読書家であり、趣味が豊かで、旅を愛し、スポーツに親しまれた文化人でありました。これからも人生の先達としてご指導をいただきたいものと念願しておりましたが、それも叶わないことになってしまいました。残念で仕方がありません。

さきに先生が寄稿された、昭和五十六年十二月の同窓会報を手もとにして回想記を書いておりますが、この号には原同窓会長さんが「高々の新風」と題して書かれており、私の雑文（銀杏並木に思う）も同じ頁にのせていただいておりますので奇しきめぐり合わせに感慨を深くしている次第です。

ひたすら先生のご冥福をお祈りして筆をおきます。合掌

（群馬県教育文化事業団理事長 38回）



いりしましたが、先生が母校の同窓会報（昭和五十六年十二月）に寄稿された、「烏兔匆匆」が冒頭にのせてありましたので、その一部を原文のまま掲げて先生を偲ぶすがといたしたいと思います。

——われわれが旧制高崎中学校に入学したのは、関東大震災の翌年の大正十三年で、卒業は昭和四年である。記録によると入学者一四八名、卒業者一一六名とある。三年生のと

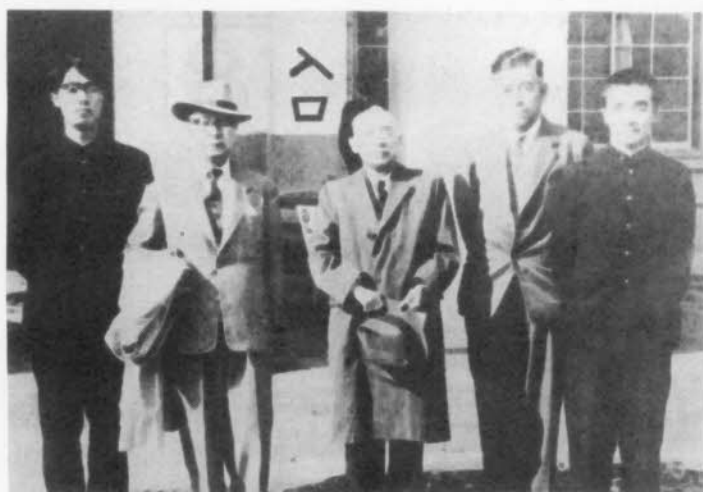
●回想

ハダシの青春

茂木弘道

高々「九〇周年小史」に、誰が選んでくれたのか、自分にとっては大変に懐かしい一枚の写真が載せられている。年中行事であった講演会に、カントの哲学で有名な「天野貞祐」先生をお招きした折に記念撮影したものである。

田中悦平先生の隣りに写っているのが、三〇年前の我が姿というわけである。何故かこの写真、写っている五人の人物の足元が写真からハミ出した構図になっている。もともとこの写真は確か足元まで写っていた筈だったがそうなっていない。その理由は恐らく、田中先生の隣りの人物のハダシ姿にある。天



野先生などという偉いお方に並んでハダシ姿とは失礼千万、ということと修正がなされたのではないかと思う。

われわれ五九期生の入学は昭和三二年。それから今に至る三〇年間は、まさに日本歴史始まって以来の一大高度経済成長の時代であった。我々の高校時代には予想もしなかった変化が起ったわけである。どのくらいの変化がこの三〇年間にあったのか、いくつかの数字に当ててみるのも一興であろう。

先づ、GNP（そもそも我々の高校時代の社会科ではこの概念を教わらなかった）であるが、昭和三三年には一兆五二〇〇億円であった。これが昭和六一年に、何と二七倍の四八五兆円になっている。年率一二％以上の伸びが続いたわけである。物価上昇率を差引いた、実質で六・八倍になっている。年率で七％である。当時の国家予算は一兆三三二六億円。その中から教育関係と社会福祉にそれぞれ一二％ずつの一六三〇億円を当てていたわけである。軍事費をやめて福祉へという。大砲かバターか。論が圧倒的な説得力を持っていたのもっともである。今では、

（昭和六二年）国家予算は、四一倍の五四兆円にまで増大し、福祉関係の予算に至っては、六一倍の九兆九〇〇億円、全予算の一八％を占めるところにまで拡大して来ているわけである。軍事を止めなかったにもかかわらずである。当時は予想だにできなかったことであつた。

確かに、当時は今から比べると格段に貧しかった。調べてみると高校の月謝は六〇〇円であつた。テレビも漸く普及が始まった段階である。昭和三三年で、全国に一九八万台、翌年、四一五万台、我々が高校を卒業した昭和三五年には六八六万台と急速に普及していくのであるが、我家には、確かまだなかったと思う。しかしながら、ハダシ姿は貧しさ故ではなかったことは言うまでもない。朴歯の下駄をぬげば廊下では年中ハダシというのがが硬派スタイルであつた。ところで、当時軟派というと、映画部がその代表であつ

た。今思うと、テレビが出始めたこの頃が映画の絶頂期であつたのだ。昭和三三年に映画観客数は一一億二七〇〇万人と頂点に達し、その後は減少傾向に向かい、昭和六一年には観客数は一億六一〇〇万人とピーク時の七分の一にまで減っている。当時の時流を最も華やかに代表していたのが映画だったというわけである。赤ん坊まで入れて日本人が平均して一年間に一二、三回もみていた映画なるものを、何とこのハダシの硬派君は、高校の三年間に一度もみることがなかったのである。いとくるおしきこそものぐるほしけれどもある。演劇に熱をあげかけたことなどもあり、決して「硬派のみるべきものに非ズ」などというガチガチの信念にもとづいての行動であつたわけではない。ただ、結果として、悲しからずや、映画という「あつき」時流に触れもせで、高校生活を送った、というのが、わが三〇年前の青春でありました。（国際羊毛事務局広報宣伝部長 59回）

●回想

通信教育との出会い

大矢保子

二人の子供もそれぞれに親の手を離れ、自立の方向に向かって歩き出した。その姿に一喜一憂することが親心と内心の喜びを隠すことができませ

んでした。しかし、日々、成長していく姿を見ていると何となくましく、「負うた子に教えられる」たとえの如く、子供に教えられることが多々あり

私自身の不勉強が痛切に感じられるようになりまし。加えて、無意識の中に心の片隅にあげられた隙間の存在にはっとしました。隙間は日とともに大きく拡がっていき、以来、何か満たされない空虚な気持ちのままに過ぎていきました。そんな折、生涯教育の一環として「高同通信教育」の門戸が開かれていることを知りました。機会の訪れを熱望しながらも、今迄果たせなかった「勉強」への夢が大きくゆすぶられました。何事によらず「学ぶ」ことへの意欲を持つことによって、日々の空しさが埋められる何かが得られることを確信して昭和五十八年四月、晴れがましく入学しました。入学後、子育ての過程で子供達に勉強することの必要性を強調してきたことが、意外と、片手落ちの面があった事を痛感しました。勉強というものは、他から強いられ、与えられるものではなく、本人の自覚の上にあることを、数多くの教科の学習を通じ理解することができました。同時にそれは学問の厳しさを知ることであり、「学ぶ」こととは何であるかを自覚することでもありました。

月二回のスクーリング、卒業迄の四年間の学校行事、定期的な支部学習会、その何れも皆勤に近い状況でした。その一つ一つが、私に「学ぶ」ことの楽しさと、新鮮な息吹とを与えてくれました。

過ぎ去った四年間は、暫くの勉強不在からくる「不安感」の往き来する毎日でありましたが、何故か毎日に、それらが拭かれていきました。四年間、高同で学んだものは、学問というには余りにも微々たるものではありませんでしたが、それでも、乾いた地表が水分を吸収していくように、全てが私自身の体に吸い込まれていくような充実感と喜びとを感じることができました。それ以上に、動機や目的を同じにして入学した数多くの同窓生との交流が、大きな心の糧として私を大きく支えてくれたのです。

過去、通信教育というと、何か暗いイメージが連想されますが、高同の場合、寧ろ明るいものでした。今迄に知らされていた学歴偏重の壁や学校格差の存在も、学ぶ主婦の立場から見れば、限られた問題としてしか映りませんでした。何はともあれ、高同での四年間は、私にとって充足感あふれる毎日であつたと思います。

過去、通信教育というと、何か暗いイメージが連想されますが、高同の場合、寧ろ明るいものでした。今迄に知らされていた学歴偏重の壁や学校格差の存在も、学ぶ主婦の立場から見れば、限られた問題としてしか映りませんでした。何はともあれ、高同での四年間は、私にとって充足感あふれる毎日であつたと思います。

年齢差を感じることなく参加できた学校行事の一つ一つ。学力差を意識することなく臨むことのできた授業。更に未知の分野を次々に拡げてくれたクラブ活動。細部にわたる懇切な添削指導。その何れもが生涯学習の名に相応しいものでした。迂余曲折した道のりを歩みながらも、高同通信教育という確固たる教育理念の底(ひきし)のもとに無事卒業することができました。

卒業を機会に、新たな学問への入り口を手探りしながら、最近になって漸くその緒(いとぐち)をつかむことができました。私にとって、生涯が学ぶことへの意欲的な対応であることを深く銘じております。過ごした高同通信教育での四年間は、新たな自己発見と創造のための大きな母胎であつたと今にして思うのです。(通信制 29回)

卒業生の作品紹介 〈4〉

記念碑「山」のための エスキース

中島嘉樹



彫刻科の門をたたいて彫刻の美しさに身の震えるのを感じたのは五年程たってからだった。静かに私達の心に語りかける物の美しさに接することが出来たのはうれしかった。また私の仕事が一歩でもこんな物に近づけるならどんなに幸せだろう、その頃から彫刻を一生の仕事にしようと思ったと思う。すべての人間の行為がそうであるように、己の働きかけ



によって事物の存在とその運動の方向の発見を深める。私はそれを彫刻という形の中に封じこめて行く、そのさうさの連続によって彫刻家たらんとするくずれがちになる決意をささえられている。

(二元会会員 57回)

同窓会だより

翠巒育英会の 充実を願って



石井敬之助

財団法人翠巒育英会は、昭和六十年一月に設立許可

を得、同年五月九名の奨学生が採用されました。本年度奨学生は十二名で、今日までの延べ人数は五十三名となっております。地方の一高校の同窓会が育英奨学財団法人を設立し、この様な事業を行なっている事は、全国的に見ても稀有な事であり、マスコミにも何度か取り上げられて居ります。この翠巒育英会を更に発展させていくためには、常にその基本財産の増加をはかる必要があります。当然の事ながら、奨学金の額は基本財産運用の利子果実によって定められます。金利の変動により、その活動の幅がせまられる事があります。またインフレによってその実質額が低下する事も考えられます。幸い本校同窓会では、叙勲・褒賞を受けられた会員から育英会へ御寄付が寄せられ、基本財産は徐々に増加して居ります。だが、理想を言えば基本財産

がいまの三倍くらいになれば、安定し充実した育英事業ができる事になります。それに至る第一歩として、校内のいづれかに、当育英会に御寄付を寄せられた方々の御芳名を記録する場所を設けてはいかがでしょうか。御寄付を寄せられた方々は、勿論その様な事を望んで居られませんが、その御好意を記録しそのお名前を留める事は、受けた側の礼儀であると思います。礼を盡くす事によって翠巒育英会に対する同窓生の理解も深まり、目的達成に近づく事と思います。育英会監査としてその充実と発展を願う余りの愚見です。御参考となれば幸いです。

(高崎玩具機代表取締役 50回)

三三三会の現況

海老原 英吉

昭和九年卒業の同級会「三三三会」もここ十年間位は何とか毎年一回は開催してきた。今年も四月十日(日)高崎ターミナルホテルで開くことができた。卒業後五十周年も過ぎて四年目、やがて「還暦会」もそう遠いことではなくなつた。毎年よく出席してくれる者、また久しく会わなかった者、仲々想い出せない者等々。しかし、いつものことながら暫く話しているうちに、全く昔にかえり高中在校時の話が次々ととび出して来る。

〔出欠状況次の通り〕

卒業生・一五〇／物故者・六〇／現在員・九〇

通知できた者・七五／出席・二二／欠席・二八／返事なし・二五

残念なことに、ここ数年集まる毎に物故者を聞くこと、また欠席返信の約半分は入院中とか身体の工合が良くないとのことだ。しかし「会」は次第に盛り上がり、今回の計画案も論ぜられ元気に歌も出て来た。皆で歌える歌となるとどうしても軍歌となる。そして最後は翠巒だ。歌詞の覚えていた部分が少ないと違っているもので、何とか終りまで歌うことができた。

一同再会を約して三々五々解散して行った。来年も、そして卒業後六十年こそ盛大にと念じつつ。

(元高校長 33回)



京浜同窓会

中曽根 信雄

毎日絵の制作にとりくんでいると月日のたつのが極めて早い。うっかりメ切りに間に合わないところだった。

さて京浜同窓会には中曽根前総理が引退してから少し低調になった様で残念に思います。昨年十二月九日にお茶の水「未見の我」で二十九名の幹事で忘年会をしたと思ったら、もうそろそろ今年も忘年会の話が出るころになってしまいました。さて今年の行事をふりかえって見ると、

・二月二十六日 京浜高々幹事会(於蔵前工業会館)出席十五名

・四月二十一日 翠巒編集会議

・五月二十六日(木)午後六時より

京浜同窓会総会・新入会員歓迎会

(於日本海運ホテル)

同窓会より来賓として須永副会長、田中順・山口正敏の各氏と母校より塩浦教頭・森・田端・茂木・小笠原の諸先生に出席して頂き盛会でした。

京浜同窓会の出席者は、新幹線が高崎が近くなった為か、母校の同窓会や期別の会に出席するようになった為か年々少なくなる様で大変残念です。然しこれも時代の流れかも知れません。最後に母校の益々のご発展をお祈り致します。

(一水会会員 39回)

◇ずいそう◇

ラグビーと私

真下 昇



昭和二十九年四月、念願の高崎高校に入学が叶い、倉賀野町の小・中学校で野球ばかりに明け暮れていた私は、入学後直ちに野球部に入部すべくおそろのおそろ部室に入部の打診に行った。当時の上級生は私から見ればまったくの大人で、部室の入口近くにいた部員に入部の意志を伝えたところ、出身中学はどこかと尋ねられ正直に答えたところ、当部は高崎市内の中学出身の者以外は入部はさせないと断わられた。落胆しながらの帰りぎわにとりかこまれた。何とその中に中学の先輩の渡辺宏氏・須永晃氏の顔が見られた。両氏がラグビー部にいたとはまったく知らなかった。その場で強引に部室に引き込まれ、それ以来現在に至るまでラグビーと縁が切れなくなってしまう。その時の一番の印象は、なんと汗くさく、ドロだらけの所だろうと感じた。部室に引き込まれたその日、小生の意志など無視し、用具も持たない小生に脱衣を命じて汗くさい誰が着たか解らぬジャージを着せ、ラグビーの知識などまったく解らぬ小生をグラウンドに立たせ、部員に新入部員として紹介した。この時点で私のラグビー人生がスタートしたのである。

当時の高々ラグビー部は県下では無敵であり、三ヶタ近くにせまる程の連勝中であつた。それは他校に比べて我々にはすばらしい指導者がいたからである。その指導者の名は岡田由重先生である。今から思えば先生も若く情熱家であつて、いつも部員より先にラグビーのスタイルをして、部員達連しと我々がグラウンドに出てくるのを待ちかまえていた。その情熱には敬服し、

常に圧倒されていた。指導よりはきびしく妥協はなかった。上級生も新入部員も同様に練習量を課され無我夢中でそれについて行くのが精一杯であり、サボル余裕すらも見えず出て行くのが精一杯であった。練習は毎日行われた。雨が降れば体育館で器具を使用して身体を鍛えさせられた。夏の合宿は炎天下の校庭で家より米を持参して長期に渡って行われた。合宿での食事といえは持参した米を炊いて出しはしたが、おかずは福神漬けとキユーリと味噌汁が主流であつたのが今となればなつかしく感じられる。それにしてもそれらの食事で体力がよく保たれたものである。合宿の後、数日休みがあつたがそれ以外は休みなく練習が続けられた。家族の者は小生が家に帰るなり勉強もせず、食事が済めば寝てしまふのを見て、部活動をやめろと迫ることがしばしばあつた。先輩達に相談すれば「ラグビーを続けていけば大学への進学や就職は可能なり」のセリフがかえってくるだけで、当時としては大変不安であつたが、それを信じる以外道はない状況下ですでにとつぷりとなつていたのである。落伍もせず練習はサボらずに出たお陰で、その年北海道で行われた国民体育大会に補欠ではあつたが出場し、楽しい思い出が作れた。旅の車中は新入生故にいつも座席の下に新聞紙を敷いて寝かされたのも思い出のひとつである。

その年の秋の全国大会予選を前にして、最上級生の中から謹慎処分者が出て最上級生全員が退部してしまつた。残された我々は部の存続がやぶまれることになつた。なぜならば一年部員・二年部員を合せてもラグビー試合に必要な十五名に満たなかつたからである。

しかし、二年生の矢島進二新主将のもと、秋からの試合は出来なかつたが、何名かの新入部員が加入し次の年のシーズンに向け鍛えに鍛えられた。毎日観音山の石段登りから始まり、5kmのサンドバッグを腰に巻いて山路を走るカントリークロス、腕立て伏せ、腹筋運動、どれをとつても、とてもハードな練習であつた。いわ

ゆる鬼コーチ岡田先生の鍛えの愛のムチであつた。その効果は抜群であり、その冬を越えた時点で足・腰・胸の太さは倍近くにも太くなった感を得たのである。この時期が小生のラグビー人生の内最も基礎体力が養成された時期であると今でも信じてやまない。苦しくて長い秋・冬のトレーニングであつた。ラグビーを行うための体力が完成され、その上に岡田先生の技術を加味した我々のチームは、昭和三十一年の神奈川国体で優勝、その年の全国高校大会ではベスト4の成績を残し、32年夏の国体では予選の決勝で僅少差で敗れ出場は果たせなかつたが、全国大会ではベスト8まで登つたのである。部員の身体もそれほど大きくはなく、また部員数も試合のメンバーを除けばダグアウトには二、三名の部員しか残つていなかった小世帯のチームを当時の上毛新聞は「山椒は小つぷでもピリリと辛い」と賞賛していた記憶がある。

東京教育大学を経て、外国系の民間企業に籍を置いたわら、ラグビーを忘れることなく続けた。三十一歳までラグビーのプレーヤーとして大学・会社のチーム等でプレーをしたが、高崎高校時代に得たラグビーの実績と自信は社会人となつてもいろいろな面で問題処理にあたるにつけ、大いに役立っている。

現在私は、日本ラグビーフットボール協会のトップレフリーとして老体にムチ打って頑張っているが、このレフリーとして今だに動ける源はあのきびしかった高々時代の鍛練があつたからだと思つてゐる。昔の人曰く「一芸に秀でよ」。今思うに野球部に入らず、ラグビー部に入部しラグビーを続けて来たことを誇りに思つてゐる。何万人もの観衆の前でレフリーとして若い選手達に混つて走つてゐる私。プレーヤー達は一生涯懸命プレーをしてゐる。それらプレーヤー達も高校時代に鍛えられて今があるのだ、どの様な苦しい経験を経てきたのかと、ふと高々時代を想う時がある。なつかしい青春に乾杯である。(ロイヤルドルトン(ドワドウル)勤務部長 56回)

母校だより

◇学芸部報告◇

。音楽部創部五十周年を迎える
。名門の誇り、高々美術部
。全国高校囲碁選手権大会出場

〈音楽部〉

音楽部（吹奏楽部）は昭和十五年に誕生し、来年は五十歳となる。県内には戦前、群馬師範・前橋商業にも吹奏楽団はあったが、音楽どころではない戦中戦後の時代を通して活動したのは本校だけで、意義深いものがあり、高中・高高校の校風・伝統のすばらしさの表われでもある。現在、OB（会長＝星野行弘氏・42回）は四〇〇名を越え、カラヤンのお目にかかりベルリンフィルで演奏した武藤賢一郎氏（70回）のように世界的な音楽家も続々生れている。来年は節目の年を迎え、すでに催物の企画がはじめられている。

五十五名の部員も活躍し、同窓会新年総会の演奏もその指揮者は、本年は安藤直典氏（45回）、来年は児玉貴氏

（47回）と卒業願にお願ひするかたちで定着し、お集まりの方々に好評である。毎年夏に行なわれる定期演奏会（二・三部の指揮は芥川正氏 80回 に依頼）も二十九回を数え、年々盛会である。種々大会の成績も向上し、昨年度は関東アンサンブルコンテスト銀賞、本年度は県吹奏楽コンクール代表次点と成果を挙げ、今後ますます楽しみである。

（音楽部顧問 波戸場研二 52回）

〈美術部〉

顧問ともども大活躍！

美術部の最近の活動は活発であり名門校高々美術部の名を他校にも誇示している感がある。翠櫓祭のポスターで力量を示した角田有君を中心に部全体が意欲的に前進している。翠櫓祭で示した展示とビデオを自主制作しパフォーマンスを加えた表現は他校にないスケールを示した。さらに秋の県高校芸術祭美術部門においては部活動として優秀学校賞を受賞、個人では角田有君（二年）が優秀賞受賞で昨年に続いて県代表として全国大会出場出品が決定、高橋勇太君（一年）が優良賞を受賞し他の作品も力作が揃い大きな成果を上げた。

さらに角田君は今年度県近代美術館で開催された青年美術展においても専門に絵を描いている青年達の中にあつて、堂々と高校生で入賞を果たした。

顧問の井田先生も一昨年のパリのサロン展のセグラ静物賞受賞に続き、今年度はソヴィエトで開かれたソヴィエト美術賞展において見事グランプリ（大賞）を受賞し、日ソ批准協定後初の政府機関関係の展覧会として快挙である。生徒にチャレンジ精神を示したことが部員の大きな刺激にもなつて部活動の成果につながってきている。

今度は来春の全日本学生油絵コンクールに向かって何人かの者が構想を練っている現在の美術部である。

（美術部代表）

〈囲碁部〉

昭和六十三年八月、東京・市ヶ谷の日本棋院会館で、第十二回全国高校囲碁選手権大会が開かれ、大江茂広君（二年）が群馬県代表として個人戦に出場、三回戦に進出した。

来年の大会では、より上位に進むべく、棋道の修行に励んでいる。

（囲碁将棋部顧問 茂木道弘 70回）

◇運動部報告◇

○石曾根(スケート)インターハイ・国体出場
○軟庭(織茂・宮田組)(岡部・岩田組)
陸上部、登山部 関東大会出場

名門・高々の運動部は、先輩方の期待を裏切り、関東・全国大会等へと出場する部が少なくなり、全国への出場はスケートの石曾根(二年)のみとなり、関東へは軟庭部、陸上部、登山部となり淋しいかぎりである。

バスケット、ラグビー、サッカー等の伝統ある部の一層の奮起が望まれる。往年の高々復活を目指して一層の努力が望まれるが、OB諸兄の物心両面に渡る御支援をよろしくお願いいたします。各部の主な成績を御報告をいたします。

○野球部

秋季大会三回戦、春季大会一回戦、夏季大会二回戦

○ラグビー部

県総体三回戦、一年生大会準優勝、県選手権ベスト8

○サッカー部

県総体三回戦、インハイ予選三回戦、県選手権西毛予代表戦負け、秋季大会ベスト8

○軟式庭球部

〔団体の部〕 県総体三回戦、県選手権ベスト16、新人大会第三位

〔個人の部〕 県総体(織茂・宮田組)(岡部・岩田組) 関東大会出場、イン



ハイ予(織茂・宮田組)(岡部・岩田組) 五回戦、新人大会(岡部・富澤組) 第三位、水曜杯大会(岡部・富澤組) 優勝

○硬式庭球部

県総体団体ベスト8、友田・関組ベスト8、インハイ予友田・関組第三位

○スケート部

石曾根、インハイ、伊香保国体、全



日本ジュニア各種大会出場

○水泳部

新人大会優勝、百米自由形、二百米個メドレー(高橋)、四百米メドレーR(浅川・加藤・小淵・高橋)、四百米R(高橋・小淵・石曾根・白井)、インハイ予下位入賞者多数

○剣道部

県総体〔団体の部〕ベスト8、インハイ予ベスト8〔個人の部〕小笠原ベスト16

○卓球部

県総体、インハイ予ベスト16、新人大会ベスト8、全日本ジュニア県予吉田正弘ベスト8

○弓道部

県総体、インハイ予ベスト16



○陸上部

関東大会出場、秋永一千五百米、因一百十、相原・松本・佐伯・因四百R、茂原―新人大会五千米二組優勝

○空手道部

高崎市民大会〔団体の部〕三位、〔個人の部〕四位

○登山部

県総体七位(関東大会出場)



○バスケット部

県総体、インハイ二回戦、新人大会三回戦、強化大会・西毛大会二位

○柔道部

県総体二回戦、インハイ予三回戦、新人大会三回戦、個人戦は各種大会出場

○バレー部

県総体、インハイ予、秋季大会ともにベスト8、西毛地区大会優勝(運動部長 清水敏男)

第42回 高・前高 定期戦



(通算22勝15敗3引き分け2中止)

それに応える選手達、そして応援。どれを取っても劣る所はなく、全てが順調の様に見えるが、遂に勝利の女神の微笑みだけは手にすることが出来なかった。無念である。

個々の競技は今年は、部対抗では軟式庭球・硬式庭球の連勝、殊勲の柔道等の活躍の裏でラグビーの敗北をはじめとして大波乱となり、一般対抗では数個差の玉入れや一位こそ取れぬもの

の二、三位続きの駅伝など、僅差の勝負が目立った。

騎馬戦復活の兆しも見え、一段と面白味を増した定期戦。今後の高々の動向に是非とも注目、そして期待したい。

(定期戦実行委員長 中島広明)

降り続ける時雨の合間を縫った奇蹟的な晴天の中、第42回定期戦本戦は火蓋を切った。野球の借りも水泳で返し、前日迄に六対九と追い上げ勢いに乗った高々は、「我が高々に栄光あれ」を合言葉に一丸となり、敵校前橋を相手に熱闘に次ぐ熱闘を重ねた。

種別	高一般	高部	前一般	高部
陸上	3	0	6	6
バスケットボール	2	0	7	6
バレーボール	7	0	2	6
軟式庭球	9	6	0	0
卓球	4	0	5	6
ラグビー	／	0	／	6
サッカー	／	6	／	0
柔剣道	／	6	／	0
野球	／	0	／	6
硬式庭球	／	6	／	0
弓道	／	6	／	0
空手	／	0	／	6
駅伝	0	／	9	／
綱引	3	／	6	／
玉入れ	3	／	6	／
水泳	6	／	3	／
ソフトボール	0	／	9	／
小計	37	30	53	48
総合	67		101	

翠巒文庫・BOOK

卒業生の方々や本校にゆかりのある方々の著書で、学校へ寄贈して下さったものを図書室に展示し、生徒に利用させています。翠巒文庫と称し、現在(63・11・19)まで三百八十七冊になりました。本年寄贈いただきました書名を次に記します。

書名 著者

- 読書空間の近代 佐藤健二 74回
- 波濤を越えて 中曾根康弘 35回
- 秀嶺傑名紫に2 51期会報
- 流翠 高中卒業45周年記念誌 41回
- 都市その原点 山田博久 52回
- 港運概論 天田乙丙 42回
- 高校生のための 岡田豊治 55回
- 群馬の文学 天田賢 44回
- 町医春秋 田島桂男 51回
- 群馬19／28 佐藤達全 65回
- 典座教訓 斎藤晋 56回
- 尾瀬 生産の生物学
- 上信越高原国立公園霧積山付近の野生動物調査報告書 斎藤晋 56回
- 上信越高原国立公園霧積山付近と地蔵峠付近の野生動物調査報告書
- 桐生市動物誌
- スターリン その謀略の内幕 新井康三郎 51回

図書館司書の藤原富美子さんが、今年度末人事異動で、前橋工業へ転動しました。この十年、新図書室の整備にあたられ、今日の基礎を築いてくださった方でした。特に、高々の火災時のままであった旧蔵書の整理は、なみなみならぬ苦勞があったと思います。夏休みに風通しの悪い三階の書庫に入り、汗をかきながら分類整理してくれました。司書の仕事は目立たず、その仕事の評価されないままでおわってしまふことが多いのですが、この紙面をかりて、一言感謝申し上げたいと思います。

さて、先号でも書きましたが、高々でなければならぬ蔵書を、今後考えてゆかなければならないと思います。新幹線駅をひかえているためか、県外からの見学者や研究者が、先輩の足跡や資料をもとめて来校されることが多くなってきたと感じます。大手拓次のことはさることながら、土屋文明については、何も無いという現状では、研究者に失礼だと思ふことがしばしばあります。最近、校歌作詞者の草野心平先生がお亡くなりになりましたが、心平先生の関係の資料もございません。嘆くことばかりで申し訳ありませんが、高々の教養を示す意味でも、図書の実をかりたいという熱意をおくみとりくださってご協力をお願いいたします。

(吉永哲郎 54回)

最近の 進学状況について

過去三年間の進路状況は下表の通りです。昭和六十三年入試の結果は、一昨年とほぼ同じでした。昨年より少し数をへらしましたが、まずまずといったところです。内容的にみますと、実際の進学者数で国立大学は昨年と同数で健闘し、私立大学できびしかったわけです。

ここ数年、十八歳人口が増加し全国的にきびしい入試になっておりますが文武両道・三F精神のもとに、高高ではあくまでも授業を中心にすえて、学力を向上させ生徒の希望をより達成させるべく、全職員が一九となつて努力していききたいと考えております。

進路指導面では、本校で開発させていただきました校内模試・実力テスト処理などの電算システムが完成し、今年から資料の出力を行い進路指導に役立てております。また、本年十月から大学入試センター提供によるハートシステムを逸早く導入いたしました。現在、三年生は勿論ですが一、二年生も活発な利用を行い、いろいろな情報を引き出し活用しております。

今後の各位の一層の御鞭撻をお願いいたします。

(進路部長 佐藤忠弘)

進路状況 (全日制)

()は現役

大学	年次	61 年	62 年	63 年	大学	年次	61 年	62 年	63 年
北 大	大	15 (6)	5 (3)	6 (4)	早 大	大	56 (15)	59 (15)	43 (13)
東 大	大	20 (10)	13 (7)	17 (9)	慶 大	大	24 (10)	34 (11)	32 (15)
東 大	大	6 (4)	12 (8)	8 (4)	中 大	大	51 (15)	46 (16)	31 (12)
一 大	大	6 (3)	3 (1)	3 (2)	明 大	大	48 (11)	66 (19)	50 (12)
東 大	大	0 (0)	4 (1)	2 (1)	日 大	大	54 (5)	43 (12)	40 (10)
千 大	大	10 (4)	12 (7)	9 (4)	上 大	大	19 (7)	11 (5)	10 (2)
京 大	大	5 (2)	6 (4)	7 (4)	法 大	大	33 (8)	27 (4)	27 (5)
新 大	大	16 (11)	15 (5)	20 (11)	立 大	大	9 (4)	12 (4)	17 (2)
筑 大	大	8 (3)	9 (6)	2 (1)	東 大	大	6 (2)	8 (1)	12 (3)
金 大	大	5 (3)	15 (7)	8 (2)	東 大	大	36 (10)	43 (10)	35 (4)
東 大	大	1 (0)	3 (3)	0 (0)	芝 大	大	10 (5)	8 (2)	4 (0)
群 大	大	46 (25)	45 (26)	60 (28)	成 大	大	5 (2)	4 (1)	3 (0)
横 大	大	5 (1)	16 (4)	6 (5)	学 大	大	5 (2)	9 (5)	6 (0)
静 大	大	3 (1)	2 (0)	3 (2)	青 大	大	22 (2)	10 (4)	18 (11)
山 大	大	0 (0)	1 (0)	3 (2)	武 大	大	4 (1)	6 (2)	3 (0)
埼 大	大	4 (3)	8 (5)	7 (6)	同 大	大	4 (4)	5 (1)	7 (3)
信 大	大	3 (1)	7 (4)	9 (2)	立 大	大	4 (1)	12 (4)	10 (1)
横 大	大	0 (0)	3 (1)	5 (2)	そ の 他		194 (36)	220 (64)	202 (51)
高 大	大	22 (5)	25 (14)	13 (8)					

種別合計 (全日制)

()は現役

大 学 名	61 年	62 年	63 年
A. 国 立	181 (85)	224 (117)	223 (108)
B. 公 立	36 (10)	40 (19)	28 (14)
C. 私 立	542 (128)	563 (150)	482 (119)
A + B + C	759 (223)	827 (286)	733 (241)
D. 短大, 各種他	7 (7)	8 (5)	18 (4)
総 計 (延 数)	766 (230)	835 (291)	751 (245)
卒 業 者 数	403	402	404
現 役 進 学 者 数	164	192	165
現役合格率 (合格者数÷受験者数×100)	43.7 %	47.6 %	41.1 %

昭和63年度母校職員人事異動

(全日制)

根岸輝治 教頭先生 前女へ (後任 塩浦徳三郎先生)
山賀邦次 先生 (後任 中畑 浩先生)
志村紀三男 先生 (後任 富田 一仁先生)
鹿野福次 先生 (後任 大森 威先生)
吉野進 先生 (後任 飯野良二先生)

(通信制)

樋口 久先生 吉井へ (後任 増田 泰先生)
藤原富子 先生 前工へ (後任 高橋利恵子先生)
都築芳子 先生 高商へ (後任 佐藤正子先生)
堀隆哉 先生 (後任 松浦行雄先生)
平田昭夫 先生 (後任 熊谷 章先生)

昭和62年度 高高同窓会経常会計報告

(昭和62年1月~12月)

収入の部

費目	62年度予算	62年度実収入	備考
繰越金	203,010	203,010	
入会金	850,000	864,000	全日制414、通信制18
維持会費	4,600,000	4,975,350	
利息	30,000	50,464	
繰入金	0	412,106	90周年記念事業残金繰入
合計	5,683,010	6,504,930	

支出の部

費目	62年度予算	62年度実支出	備考
会議費	800,000	556,002	総会補助
祝賀費	500,000	361,140	京浜同窓会他
饗別費	150,000	122,000	62年度転退職職員へ
慶弔費	130,000	40,000	葬儀花輪代
通信印刷費	300,000	230,896	維持会費納入札状印刷費他
旅費	150,000	100,000	京浜同窓会出席者
会報送費	1,100,000	1,262,440	同窓会報送費
同窓会報費	1,000,000	1,254,010	印刷代、封筒入、シール貼り
同窓会事務費	600,000	467,500	人件費他
同窓会長賞費	100,000	47,750	記念品代
補助費	600,000	600,000	図書館補助、翠樹体育会補助
雑費	100,000	131,160	維持会費納入ミスの返金10万、広告代
予備費	153,010	0	
合計	5,683,010	5,172,898	
差引残高	1,332,032	特別会計へ 次年度繰越	1,300,000 32,032

経常会計・特別会計について上記のとおり報告します。

昭和63年1月13日

高高同窓会会計

高橋 千代三
松井 正樹
矢島 哲雄

監査の結果、上記報告に誤りのないことを認めます。

昭和63年1月13日

高高同窓会監査

須永 孝
石井 敬之助

昭和63年度 高高同窓会経常会計予算案

(昭和63年1月~12月)

収入の部

費目	金額	備考
繰越金	32,032	
入会金	850,000	新入生
維持会費	4,800,000	
利息	30,000	
合計	5,712,032	

支出の部

費目	金額	前年比(増○減△)
会議費	600,000	△ 200,000
祝賀費	400,000	△ 100,000
饗別費	150,000	
慶弔費	100,000	△ 30,000
通信印刷費	300,000	
旅費	150,000	
会報送費	1,280,000	○ 180,000
同窓会報費	1,260,000	○ 260,000
同窓会事務費	600,000	
同窓会長賞費	70,000	△ 30,000
補助費	600,000	
雑費	50,000	△ 50,000
予備費	152,032	△ 978
合計	5,712,032	

昭和62年度 高高同窓会特別会計(同窓会基金)

(昭和62年1月~12月)

繰越金	利息	支出
7,927,746	334,265	
62年度経常会計より	1,300,000	支
合計	9,562,011	なし

創立100周年準備基金

繰越金	支出
3,000,000	
合計	3,000,000

第87回高高同窓会 新年総会へのお誘い

同窓生の皆様には益々お元気で御活躍の事とお慶び申し上げます。

さて、我々の母校高高も今年で創立九十二年を迎え、百周年に向かってその歩みを力強く続けております。

高高同窓会新年総会も年々盛況になって来ておりますが、我々当番期(五十八期)といたしましても、第八十七回総会が盛大な会となります様一同努力しております。

尚、総会後の懇親会では、肩を組んで声高らかに校歌・翠樹等を歌い、懐かしい学生時代を思い起こし、楽しい時間を過ごしたいと思っております。

同窓生の皆様、来年一月の新年総会には一人でも多くの御出席を当番期一同心よりお待ち申し上げます。

・期日 六四年一月二八日(土)

・時間 午後三時

・場所 高崎ビューホテル

・会費 四、〇〇〇円

(当番期代表 山口正敏 58回)

高高同窓会 会則改正

昭和六十三年度総会で、同窓会の一層の発展のために、副会長の定員に幅を持たせ、また本部幹事会幹事長を設置することが決まりました。

1、第4条

〔現行〕 本会に、会長1名、副会長5名、書記2名……

〔改正〕 本会に、会長1名、副会長若干名、書記2名……

2、第5条(2)

〔現行〕 副会長は、3名を総会において選出し、他の2名は母校の教頭をもって充てる。

〔改正〕 副会長は、若干名を総会において選出し、母校の教頭2名をこれに加える。

3、第5条(7)

〔現行〕 本部幹事は、15名前後とし、会長が委嘱する。

〔改正〕 本部幹事は、15名前後とし、会長が委嘱する。本部幹事中より会長が指名する幹事長を置く。

4、追加

附則

この規約は、昭和63年1月23日から施行する。

編集後記 多忙の折、本会報のためにご協力下さいました方々に厚く御礼申し上げます。(本部幹事・校内幹事)